清代における山西商人

佐伯　富

【要約】ヨーロッパ近世の独裁政治と都市商人とはその利害が相一致し、両者は相互援助のもとに発展を遂げた。宋代以後、中国の近世社会においても独裁政治が発達するが、その背景にはやはり商人が財政的に大きな役割を演じた。清朝独裁政治の発展にも山西商人が政商として大きな貢献をなした。本稿では山西商人が清朝政権と結合した経緯を明らかにし、その財政に対していかなる貢献をなしたかを、主として塩政などを中心に具体的に述べている。一方、山西商人発展の原因を清朝政府の独占権の賦与、資金の貸与、その結果による販路の拡大等の面から考察し、さらに進んで山西が東西・南北の世界交通路の交差する要衝に立地し、ここに多くの王朝や政権が勃興し、それとの結びつきから山西商人が古くから発展していたことを考察している。清朝を背景に大をなした山西商人も、阿片戦争後、世界の交通路に大変動を生じ、上海を中心とする海上交通が盛大に赴くと、従来の陸上交通はさびれ、清朝のバックアップを失うと共に衰微に向かい、新しい財閥が出現するのである。

史林　六〇巻一号　一九七七年一月

一　はしがき

ヨーロッパ近世の独裁政治の発展には、都市商人の財政的背景があり、また商人の発展には独裁君主の政治的な庇護があった。両者は利害が相一致し、相互に援助したので、独裁政治はいよいよ発展した。宋代以後、中国の近世社会においても独裁政治が発達するが、その背景には、やはり商人が重要な役割を果たしていた。

清朝が満州の辺陬から興起して中国内地に侵入し、征服王朝として三百年近く中国を支配し、独裁君主政治を確立したのは、諸種の原因が考えられるが、商人が清朝財政の確立に寄与したことが、もっとも大きな原因の一つである。この商

人の寄与を無視しては、清朝の興起とその発展は到底考えられない。この商人とはいうまでもなく政商、つまり御用商人であるが、なかんずく清朝の財政にもっとも大きな貢献をなしたのは山西商人である。

清朝は満州の奥地に興起し、しかも少数の満州人をもって、これに百倍する多数の中国人を支配しようとした。そこで清朝は北方勢力を結集して南方の中国人の勢力を抑えようとした。軍事的には、まず蒙古人をその与国としてその翼下に収め、満蒙連合の力をもって中国に君臨したが、経済的には中国人を除いて有能な民族がいないため、首都北京にもっとも近接する山西商人を利用してその財政面を担当させたのである。①

二　清朝と山西商人との結びつき

山西商人は早くから満州方面において活躍していた。後漢時代、すでに山西商人がこの方面に商売に来ているから、②明末清初、多数の山西商人が満州に来ていたことは想像に難くない。山西商人が清朝政権と密接に結びつき、政商として清代に大きな活躍をしたのは、山西商人がすでに早くから、満州において諸種の方面で経済的に活躍し、清朝の興起に対して大きな貢献をなしたからに外ならない。③

清の太祖が撫順城を占領した時、撫順には山西・山東・河東・河西・蘇州・杭州などの処の十六人の豪商がいたので、太祖はいわゆる「七大恨」を書してこれらの商人に付し、中国にもち帰らせている。④山西商人は清初すでに撫順で活躍していたのである。山西商人は太祖と撫順の貿易場において貿易し、人参・貂・真珠などの物資を購入したために、太祖の利は数万を下らなかったという。⑤

清朝と山西商人との結びつきは、こういう所から密接になったものと思われる。そこで山西商人の一族の中には、官吏や軍人として早くから清朝に帰附して高官に登っている者もかなりあったようである。⑥

三　清朝財政と山西商人

清朝では入関に際しては、山西商人を招撫し、山東の漕運を制圧することをもって、二大急務とした。清世祖実録巻五順治元年五月己亥の条に

都察院参政祖可法・張存仁言。……至於山東乃糧運之道。山西乃商賈之途。急宜招撫。若二省兵民。帰我版図。則財賦有出。国用不匱矣。啓入。摂政和碩睿親王報曰。爾等言是。

都察院参政祖可法・張存仁いう。……山東に至っては乃わち糧運の道あり。山西は乃わち商賈の途あり。急に宜しく招撫すべし。若し二省の兵民、我が版図に帰すれば、則わち財賦出ずるあり、国用匱しからずと。啓して入る。摂政和碩睿親王報じて曰わく、爾等の言、是なり。

といっているのは、山西商人が清朝の財政に如何に重要であるかを、清朝政府が認識していたかを物語っている。そこで清朝政府は入関定鼎するや、山西商人を内務府の商人つまり政商に命じている。⑦

それでは山西商人は清朝の財政にいかほどの貢献をなしたものであろうか。そのもっとも大なるものは塩税である。塩税は清朝においては、国初では歳入の約半分を占めている。清末、海関税その他の新財政が出現するに及んでも、なお三分の一を占めている。いかに塩税が国家の財政に大きな役割を果たしていたかが分る。⑧

ところで重要な塩場の塩の販売はほとんどみな山西商人が引請けていた。塩場のうちもっとも広大な販路（行塩地）をもつものは淮南塩である。淮南塩は一旦揚州に運ばれ、ここから江蘇・安徽・江西・湖北・湖南・貴州等の七省に販運される。そこで淮南塩の産額は全国産塩額の四割を占め、塩税もまた全国塩税の半ばを占めていた。淮南塩が国家の財政に対していかに重要な位置を占めていたかが推察される。⑨

ところで淮南塩場の塩は山西商人と徽州（新安）商人とが主として、これを販運していたが、山西商人の方が有力であっ

たらしい。時代は少し遡るが、明の謝肇淛の五雑組巻四に

富室之称富者。江南則推新安。江北則山右。新安大賈魚塩為業。蔵鏹有至百万者。其它二三十万則中賈耳。山右或塩或絲或窖粟。其富甚於新安。新安奢而山右倹也。

富室の富を称する者、江南は則わち新安を推し、江北は則わち山右なり。新安の大賈は、魚塩を業となす。蔵鏹百万に至る者あり。その它二三十万なる者は中等の賈なるのみ。山右は或いは塩、或いは絲、或いは窖粟を業となす。その富は新安より甚だし。新安は奢にして山右は倹なればなり。

と見え、徽州商人は贅沢であるが、山西商人は倹約なるため、資本の蓄積が益々大きくなったらしい。清朝においても全く同様であろうと思われる。

そこで山西出身の豪商の名がしばしば文献に見えており[10]、また嘉慶江都県続志巻一二には

揚以流寓入籍者甚多。……明中塩法行。山陝之商麇至。三原之梁。山西之閻・李。河津・蘭州之劉。襄陵(山西平陽府)之喬・高。涇陽(陝西)之張・郭。西安之申。臨潼(陝西西安府)之張。莱陽(山東)之戴。……

揚州においては、流寓入籍する者甚だ多し。……明代、中塩法行われてより、山西陝西の商人麇至す。三原の梁氏、山西の閻・李氏、河津・蘭州の劉氏、山西平陽府襄陵の喬・高氏、陝西の張・郭氏、西安の申氏、陝西西安府臨潼の張氏、山東莱陽の戴氏これなり。

と見えるように、山西商人が多く揚州に流寓して販塩に従事している。ここで断わっておきたいのは、山西商人といっても陝西商人を含むものと考えられたいことである。つまり淮南塩の販運に関しては、山西商人がその主導権を握っていたのである。この外、山西商人は両浙・雲南[11]・長蘆・河東[12]・四川[13]・福建[14]など、主要な塩場の塩をみな販運している。すなわち山西商人は全国塩場の大半を牛耳っていたのである。

以上述べたところによって、山西商人が塩税の上において、つまり国家の財政の上において、いかに大きな役割を果たしていたかが判明するであろう。なおまた山西出身の塩商は軍需・賑済・助工などのためにも莫大な金を政府に捐輸して

いる。[15]

なおここで注目すべきことは、内務府その他の中央官庁が塩商に資金を貸付けて利息を徴収し、それを官庁の費用に充当していることである。清史稿巻一二九、食貨志の条に

内府又嘗貸出数百万両。以資〔塩商〕周転。帑本之外更取息銀。謂之帑利。年或百数十万・数十万・十数万不等。

内府また嘗て数百万両を貸出して以て塩商の周転に資す。帑本の外、さらに息銀を取る。これを帑利という。年ごとに或いは百数十万・数十万・十数万不等あり。

とあり、内務府だけでも毎年数百万両の資金を貸出し、その利息を毎年百数十万両から十数万両を収めている。この塩商の中に山西商人が多数いたことはいうまでない。一二例をあげると、山西出身の揚州総商王履泰は三十万両、范清洪は十三万余両の資金の貸付を引請けている。これによって政府が莫大な利息を入手することが出来たのである。中央官庁の外、地方官庁においても官金の貸付を行ない、その利息を収めて官庁の運営費に充当している。[16]

なお山西商人は外民族の征討に際して軍需物資を調達し、あるいは鋳銭材料の銅斤の買入れに際して政府に協力するなど、経済的に政府を援助した貢献は極めて大である。[17]

四　山西商人の活躍舞台

このような貢献に対して山西商人は商販に関して政府から諸種の特権を与えられていた。例えば塩の販売に際しては政府から塩を販売することを許可する塩引の入手や、塩販売の販路を政府から保証されるなど、塩販売についての独占権を賦与されていた。ここから塩商とくに揚州の塩商は莫大な利益を得ることが出来た。[18]

なお塩商が莫大な利益を得た背景には、銅銭価が常に強気であったことが幸いした。清朝では下級の軍人や官吏はその生計が細かい所から、その俸給として多くの銅銭を支給する必要のあったことから、多額の銅銭を鋳造した。しかし銅鍋

その他の銅器が高値を呼んだために、直ちに鋳つぶされて銅銭が欠乏し、明代から乾隆の末年頃までは、銅銭価が常に騰貴しがちであった。

ところで塩商が塩を売る場合には銅銭を以てし、塩税は銅銭を銀に両替えして納付しなければならない。そこで銅銭が騰貴し続けている際には、塩商は銅銭を出来るだけ手許においておけばおくほど、利益があり、多額の銅銭を入手する塩商には莫大な利潤があった。[19] こうして多くの塩場を支配する山西商人には莫大な利益を得ることが出来たのである。

従政録巻二に

天下塩賦淮南居其半。歳額百三十万引。向来山西徽欲富人之商于淮者。百数十戸。蓄貲以七八千万計。

天下の塩賦にありては、淮南はその半ばに居る。歳額は百三十万引なり。向来、山西と徽州の富人の淮南に商なう者は、百数十戸ありき。貲を蓄うること七八千万両計を以てせり。

とあり、山西・徽州出身の淮南の揚州塩商は七八千万両という莫大な資力を蓄えている。また清高宗実録巻一二五七、乾隆五十一年六月庚寅の条によれば

山西富戸。家貲百十万者。不一而足。

山西富戸の家貲百十万両なる者は一にして足らず。

とあり、山西商人の富戸の家貲百十万を数える者は多数あるといっている。さらにまた清稗類鈔巻四四「山西多富商」には

山西富室。多以経商起家。亢氏号称数千万両。実為最鉅。今以光緒時資産之七八百万両至三十万両者。列表如左。

侯	七八百万両	介休県
曹	六七百万両	太谷県
喬	四五百万両	祁県

渠　三四百万両　祁　県　（以下略）

山西の富室は多く経商をもって家を起こす。亢氏は号して数千万両と称す。実に最鉅となす。今光緒の時の資産七八百万両より三十万両に至る者をもって表に列するに、左の如し。

と見え、光緒時代、山西省には莫大な富を擁する豪商が多数いたことを伝えている。なかんずく亢氏は数千万両という莫大な資産を有する豪商であったという。この亢氏が揚州の塩商であったことは揚州画舫録巻九に見えている。[20]

山西商人は塩業に投資する外、茶・米穀・人参・玉・毛皮・銅・綿布・雑貨などの販売にも従事し、あるいは質商を経営し、製陶業に投資するなど、各種の業界に活躍し、[21]その活動範囲は中国の全国の津々浦々にまで及んでいた。それは全国の主要な都会では、いずれの処においても山西商人の会館が設置されていたことからも類推される。[22]

さらに活動舞台は満州・内外蒙古・新疆などにも拡大されていた。このように広大な販路をもったことが山西商人をして大ならしめたのであるが、さらに進んでは哈克図における清露貿易、[23]広東における英国との茶貿易、[24]長崎における銅貿易[25]など、外国との貿易に従事するに及んでは、販路は益々拡大し、山西商人の発展は世界的となり、いよいよ伸張したのである。

五　山西商人発展の秘密

それではこのような山西商人の発展はいかなる所にその秘密があるのであろうか。平陽府志巻二九「風俗」の条に

土狹人満。毎挾貲走四方。所至多流寓。其間雖山陬海澨皆有邑人。

土狹く人満つ。毎に貲を挾んで四方に走むく。至る所、流寓多し。その間、山陬海澨といえども、みな邑人あり。

とあるように、山西省は土地が狹く人口が多いために、人々は早くから商人として活躍した。このような史料は山西省の地方志を繙けば無数に散見する。すでに宋の趙善璙撰するところの自警編巻四には

河東土地狭民衆。惜地不葬。

河東は土地狭く民衆し。土地のなくなるのを惜しみて葬らず。

と見えている。これと同じことが宋の周煇の清波雑志巻一二には次のように見える。

范仲宣公帥太原。河東地狭。民惜地不葬其親。公俾僚属。収無主燼(姚本燔)骨。別男女。異穴以葬。又檄諸郡。倣此。(宋史巻三一四略同)

范仲宣公(范純仁)が太原府に帥たる時、河東は地狭く、民は地を惜しみて其親をも葬らず。そこで公は僚属をして無主の燔骨を収め、男女別々に穴を掘りて葬らしめたり。また諸郡に檄してこれに倣わしめたり。

すなわち、山西では両親が死んでも、耕地が少なくなることを惜しみ、埋葬しない者があったのである。これは耕やす土地が少なかったことを物語っている。そのうえ、山西省には塩・鉄・石炭・礬・綢などの産物が多く、商人に多くの商品を提供することができた。[29]

また清高宗実録巻一二六一、乾隆五十一年閏七月丙申の条に

晉省路当孔道。

晉省は路、孔道に当れり。

とあるように、山西省は交通の要衝に当っていた。ここから山西省の住民をして容易に商業に従事させることになった。そして長い間、商業が繁昌している間に、おのずから商人気質というものが形成された。清高宗実録巻七八、乾隆三年十月癸未の条に

晉省風俗俭約。民家多有儲蓄。

晉省は風俗俭約にして、民家に多く儲蓄あり。

とあるように、儲蓄が山西商人の習性となった。さらに雍正硃批諭旨四七冊、劉於義、雍正二年五月九日の条、劉於義の

上奏中には次のようにいっている。

山右積習。重利之念。甚於重名。子弟俊秀者。多入貿易一途。其次寧為胥吏。至中材以下。方使之読書応試。

山右の積習として、利を重んずるの念は、名を重んずるより甚だし。子弟の俊秀なる者は、多く貿易の一途に入る。その次は寧ろ胥吏となる。中材以下に至りて、方めてこれをして読書して科挙の試に応ぜしむ。

これに対する雍正帝の硃批にも

山右大約商賈居首。其次者猶肯力農。再次者謀入営伍。最下者方令読書。朕所悉知。

山右は大約商賈が首位に居れり。その次なる者もなお肯えて農に力む。その次の者も軍隊に入ろうとする。もっとも才能の劣る者にして方めて読書せしむ。その事は朕の知悉する所なり。

と見え、山西省では商人がもっとも尊ばれた。そしてこれが山西省の伝統的気風となったのである。近世中国社会では官僚になることが最高の理想であったが、山西省では却って無能力者が官僚になるという気風さえも生じて来たのである。

このような気風の形成される背景においては、一方では山西商人が親王・貝勒などの高官と連盟して兄弟を称し、あるいは総督・巡撫と莫逆の交を結び、その結果、六部京卿・省府道以下の官吏が、その鼻息を伺うということになり、商人を重んじて官吏を軽んじるという風を生じたのである。[27]

このように山西では商人がもっとも重んぜられたのであるが、ひとかどの商人になるためには、彼等はまた、それだけの修業と努力とを積まなければならなかった。閱微草堂筆記巻二三に

山西人多商於外。十余歳輒従人学貿易。俟蓄積有貲。始帰納婦。後仍出営利。

山西の人多く外に商いす。十余歳輒わち人に従いて貿易を学ぶ。蓄積して貲本が出来るを俟ちて、始めて郷里に帰りて婦をむかえ納れる。その後仍りて郷を出でて利を営む。

とあるように、山西商人はまず外郷に出でて、十余年間も他人について商売のこつを十分に習得する。また資本を蓄積し

た後、始めて婦を娶り、独立して商売を始めた。一人前の商人になるためには、長い修業年限を積んだのである。こうして商売を始めると、彼等は信実の二字を金科玉条として、官紳や政府あるいは民衆の信用を維持することに努力した。[29]

さらに蒙古や満州に発展するためには、蒙古語などを幼少より修得した。あるいは針灸を習い、医薬を携帯して与え、あるいは中国の書物を指授するなど、きめ細かい配慮を怠らなかったのである。[30]

六　山西商人と資金

なお山西商人の発展については、さきに触れたように、政府の特別な庇護や、山西商人の地縁的業種的結合である幫の問題などがあるが、とくにここで注意しておきたいのは、その資本の問題である。すでに述べたように、山西商人自身、倹約にして資本の蓄積に努めたが、山西商人はなお政府から租税などの大金を預り、これを保管してその保管料を得た。さらにこの無利子の大金を高利で人に貸付けて、莫大な利潤を得ることが出来た。[31] また山西商人は全国の各地で活躍しており、送金の必要から票号(票荘)が彼等の間で発達した。票号は政府や一般人の送金事務をも取扱い、その手数料もまた相当莫大な額に達したようである。[32]

このように、山西商人は莫大な利益を獲得し、それがまた彼等の資本として機能し、彼等の活動舞台を益々拡大させたのである。

七　結　び　―世界的交通路の変遷と山西商人―

山西商人の隆替の事情を考えるに際しては、ここでもう一度ひるがえって彼等の活動舞台を顧みる必要がある。山西商人はすでに戦国時代から活躍していた記録がある。魏の文侯が軾したという段干木は太原の豪商であり、[33] また漢代には聶翁壹という山西商人が匈奴と密貿易を行なっている。[34] また北史巻一五魏宗室常山王遵の伝には、元淑の事蹟を記している

が、その中に

河東俗多商賈。罕事農桑。人至有年三十不識耒耜。

河東は俗、商賈多し。農桑を事とすること罕なり。人、年三十にして耒耜を識らざるものあるに至る。

とあり、北魏時代に、河東すなわち山西では商人が多くいたことを記している。このように商人が多く輩出したのは、山西省が古くから世界的交通の孔道に当っていたからに外ならない。

つまり山西省は万里長城の南側に位置していることからも推測されるように、西域と連なる東西交通路の要衝に当っており、ここを商品が盛んに往来する。また広東から北上して開封・太原・大同を経て、内蒙古の帰化城から北方に進むと清露国境の哈克図に達し、シベリアを経て欧州に通ずる。[34] このルートも重要な交通路であった。清代には帰化城、綏遠城から、このルートを通り、多額の茶が山西商人によって哈克図まで運ばれた。ロシア商人はここで茶を買取り、レニングラードまで運んだのである。[35]

このルートは清代に至ってはじめて開発されたものではなく、中国の歴史が始まる頃から、あるいはそれ以前から、すでに開かれていたらしい。ノイン・ウラの遺跡もこのルートの上にあり、中国や西方の商品がこのルートによって運ばれていたことは、その発掘された遺物がこれを物語っている。[36] 漢代より以前、すでにこのルートによって東西両洋の交渉があったことは、シベリアや山西省等から発掘された青銅器等によってこれを知ることができる。[37]

このルートは歴史時代に入っても、依然として重要な交通路であったらしい。中国の歴史を繙いて見ると、このルート上、とくに山西省に都あるいは陪都を奠めた王朝や政権が多い。伝説時代の堯や舜の都は山西の平陽・蒲坂にあったといわれる。夏王朝の都も山西にあった。また春秋五覇の一である晋の文公は絳（山西新絳県）に都し、戦国七雄の一、魏ははじめ安邑を都としていた。南北朝時代には劉淵が平陽（臨汾県）に都を尊め、北魏もはじめは盛楽によったが、のち南下して都を平城（大同）に遷している。五代の後唐・後晋・後漢・北漢などもみな晋陽（太原）に根拠地をおき強大になっている。[38]

唐の高祖や太宗が蹶起したのも晋陽であった。民国に入って閻錫山は山西にあって山西モンロー主義を唱えている。[38]

さきに指摘したが、山西省は耕地が少なく土地からあがる税金も少ない。従って田租をもって国家の財政を支えることは困難である。しかるに、上述のように山西省を根拠とした国家や政権が多いのは、山西省が東西・南北の世界の交通路の交叉する要衝に当っていたからに他ならない。これまで東西交渉を論ずる者はいわゆる絹街道だけに注目する者が多いようであるが、北廻りのルートも軽視すべきではなかろうと思われる。阿片戦争以後、上海を中心として世界的海上交通が盛大に赴く以前、西方との貿易は主としてこれらの陸上交通によって行われ、山西省はその要路に当っていた。ここに山西商人が古くから商人として活躍する理由があった。

そこで上海が西方との交易の要衝にのし上って来るとともに、山西商人は衰頽を始めるのである。もっとも山西商人の衰頽には、清末、銀の流出に伴って銅銭価が暴落し、塩の販売による利益を喪失し、あるいは清朝政府の衰亡から資金の貸付や莫大な税金保管の依嘱がなくなったこと、[40] あるいは新興勢力との協力を拒絶して時勢に乗ずる機会を失ったことなど、[41] 諸種の原因が考えられるが、世界経済の大発展に伴って世界の交通路に大変動を来したことが、もっとも重要な原因の一つであることは間違いない。山西商人の衰頽は同時に清朝の衰亡を意味することはいうまでもなかろう。

註

① 佐伯富「清朝の興起と山西商人」(『中国史研究』第二、所収)。

② 後漢書巻一一一王烈伝。
王烈字彦方。太原人。……遭黄巾董卓之乱。乃避地遼東。夷人尊奉之。……太守公孫度接以昆弟之礼。訪州政事。欲以為長史。烈乃為商賈自穢得免。

③ 同①
佐伯富「清代塞外における山西商人」(東方学会創立二十五周年記念東方学論集)。

④ 清太祖実録巻五、天命三年四月乙巳。
留兵四千。毀撫順城。……時有山東・山西・河東・河西・蘇・杭等処。在撫順貿易者十六人。皆厚給貲費。書七大恨之言。付之遣還。

⑤ 籌遼碩画巻二「張濤揭為屈夷家事互搆事」。

⑥ 同①。

⑦ 介休県志巻九「人物」。
范三拔……父永年。与遼左通貨財。久著信義。世祖入関定鼎。稔

知永年名。即召見。将授以官。以未諳民社力辞。詔賜張家口房地。隸内務府籍。仍互市塞上。三拔継之。数著労勲。

⑧ 佐伯富『清代塩政の研究』第一章。

⑨ 同前。

⑩ 同①。

⑪ 続呂涇野先生文集巻六「平斎李君墓誌銘」において、陝西三原の商人李琮について述べた中に、次の記事が見える。

少嘗従父賈塩河東・淮上及滇・浙。

⑫ 参照①⑪。

⑬ 四川塩法志巻三九。

川中民貧。所称為塩商者。多山陝之民。

同書巻四。

各州県旧額。本地之商殷実者少。大半皆西商。

⑭ 福建塩法志「配運」。

官辦各幫。酌擬匀令西商代銷塩数。

⑮ 同①。

⑯ 同前。

⑰ 同前。

⑱ 『清代塩政の研究』第三章。

佐伯富「中国近世における独裁君主の経済政策」（『中国史研究』第二所収）。

⑲ 同前第五章。

「中国近世における独裁君主の経済政策」。

⑳ 揚州画舫録巻九。

亢園在小秦淮。初亢氏業塩。与安氏齊名。謂之北安西亢。亢搆園城陰。長里許。自頭敵台起。至四敵台止。臨河造屋一百間。土人呼為百間房。

㉑ 佐伯富「清代新疆における玉石問題」（『中国史研究』第二、所収）。

「清代における山西商人と内蒙古」（『藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集』）。

参照①③。

㉒ 何炳棣『中国会館史論』。

㉓ 朔方備乗巻四六、所収何秋濤『考訂綏服紀略』。

㉔ No. 18. Mr. Bruce to Earl Russell (Peking, June 1. 1862.) (Further Papers relating to the Rebellion in China.)

劉選民「中俄早期貿易考」（燕京学報二五期）。

清宣宗実録巻一八四。

太谷・平遙・介休各県民人。多在広東及南省等処貿易。

『中国近代手工業史資料』第一冊、袁幹「茶市雑詠」、林馥泉「武彝茶葉之生産制造及運銷」に、山西商人が、福建建州の武夷茶を支配している記事がある。英国は武夷茶を輸入していたのである。

㉕ 同①。

㉖ 同前。

㉗ 李渭清「山西太谷銀銭業之今昔」（中央銀行月刊六巻二期）。本資料は台湾大学、趙雅書教授の指教をうけた。

㉘ 西山栄久「山西票号の今昔」「票号の組織」（支那一八巻一号）。

㉙ 同③。

㉚ 民国経世文編第四冊実業三、梁啓超「蒞山西票商歓迎会演説辞」。

吾票号与商家通有無之処。固属不少。然大抵以官場存款為大宗。……吾票号因各有平色不同。故能於匯兌中有所取盈。……吾国昔日無所謂金庫制度。凡官家所収租税。悉存殷実之商号。以負保管之責。得十一之利。

㉛ 西山栄久「山西の為替業者たる票号の起原と其の変遷」（東亜経済研究一一巻一号）。

陳其田『山西票荘考略』。

㉜ 史記巻四四、魏世家。

〔魏〕文侯受子夏経芸。客段干木過其閭。未嘗不軾也。正義曰。…

…淮南子云。段干木晉之大駔。而為文侯師。

㉝ 漢書巻九四、匈奴伝。

匈奴自単于以下。皆親漢。往来長城下。漢使馬邑人聶翁壹。間闌出物。与匈奴交易。補注。周寿昌曰。聶壹叙伝云。以財雄辺。

㉞ 外蒙古の中央にあるトラ・オルコン・セレンガの三河の合流する附近一帯は、水草の豊富な地と称せられ、この地域を占領した者は、北アジアに覇を唱えることが出来るといわれている。それは肥沃な牧場であるからである。それと同時にこの地域は、古来、世界の北廻りの東西交通路の要衝であり、商品がこの地域を通過するので、その利益が相当大きかったことも考慮する必要があると思われる。のちの哈克図はこの近くにある。

㉟ 参照㉑。

㊱ 梅原末治『古代北方系文物の研究』「北蒙古発見の漢代の漆器」・「考古学上より観たる漢代文物の西漸」（再版、昭和四十六年、新時代社）。

同『東亜考古学論攷』第一「支那文化の源泉」（昭和十九年七月、星野書店）。

江上波夫『ユウラシア古代北方文化』（昭和二十五年七月、山川出版社）。

㊲ 梅原末治『古代北方系文物の研究』「北支那発見の一種の銅容器と其の性質」。

同『東亜考古学論攷』第一「所謂秦銅器に就いて——支那古銅器に於ける戦国様式の設定——」。

㊳ 宮崎市定「五代史上の軍閥資本家——特に晉陽李氏の場合——」（人文科学二、四・『アジア史研究』第三、所収）。

㊴ 陳少校『閻錫山之興滅』

㊵ 『清代塩政の研究』第六章。

㊶ 宣統年間、山西商人は度支部銀行（後の大清銀行、中国銀行）設立に際して、その合作を断わっている。（李渭清「山西太谷銀銭業之今昔」）。

（昭和五十一年一月十八日、台湾大学宿舎にて）。

（京都大学名誉教授

The *Shan hsi* 山西 Merchants in the *Ch'ing* 清 Dynasty

by

Tomi Saeki

In Europe, absolutist government and urban merchants had interests in common and developed with mutual aid. Similarly in China, the growth of absolutism, since the end of *Sung* 宋 period, had been supported financially by the merchants. It was *Shan hsi* merchants that had contributed to the growth of *Ch'ing* dynasty.

The one purpose of this article is to make clear how the *Shan hsi* merchants formed an alliance with the dynasty and managed its public finance, especially salt trading policy. The another is to analyze the causes of their growth: that they gained monopolies and subsidies from the government and consequently could expand their trading areas; and they took advantages from their native country, *Shan hsi*, which held a commanding position in the world-wide trade route and where many dynasties and regimes arose.

But after the Opium War, the mainstream of the trade route shifted from land to sea and there flourished the oversea communications centering on *Shang hai* 上海. And with the loss of support from the *Ch'ing* dynasty, they began to decline and would be substituted by a new group of plutocrats.

The Reclamation of the Fens in the Seventeenth-Century England

by

Koji Hasegawa

Reclamation introduces a sudden change into the landscape and function of a marshy region. The purpose of this paper is to clarify the process of change in the reclamation of the English Fenland, especially of the Bedford Levell. Many works on the draining of the Fens have been done by H. C. Darby and other historical geographers. But they have only given us abundant sources for reserch without exactly reconstructing the cross-sectional landscape of each age.